

# 養護・訓練

# 目 次

○ 基本的な考え方	4 9 9
○ 目 標	4 9 9
○ 指導事例	5 0 0

## 1. 基本的な考え方

精神発達遅滞児は、単に知的な発達の遅れだけでなく、知覚・認知、運動・平衡感覚、意思の伝達、思考・概念形成の障害、固執性などの様々な心理・行動障害を併せ持つ場合が多い。

養護・訓練は、このような児童生徒の心身の障害の状況を改善し、又は克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、心身の調和的発達の基盤を培うことを目標としている。

教育課程全体の中で領域として位置づけられている養護・訓練は、教育のあらゆる機会に様々な指導形態で実施されるが、大別すると、各指導形態の中で配慮的に行われる「養護・訓練に関する指導」と、特設され、障害別に個別あるいは小集団で個々の実態に即した方法で実施される「養護・訓練の時間における指導」の2つが考えられる。

本校ではこれまで、心身の障害に基づく種々の困難を克服させ、社会によりよく適応していく資質を養うため、学校の教育活動全体を通じて、養護・訓練に関する指導を配慮的に行ってきた。その結果、教科・領域、その他の活動での指導を通じて、言語（吃音等）、運動機能、情緒面の障害において、望ましい変容の見られた子どもがあった。

しかしながら、一人ひとりの子どもの様子を見ていくと、

- 発音の異常や吃音など、言語に障害を持つことが、心理的に消極性の原因となり、知的な能力を十分に発揮できない子ども
- 多動で、社会的人間関係を持たず、学級集団の中ではなかなかフォローできない子ども
- 運動機能面で、アンバランスな動作が多く、一斉の指導の中の配慮だけではなかなか改善が見られにくい子ども

など、それぞれに問題をかかえ、状態像に望ましい変容が見られにくい子どもがいる。

これらの子どもたちの中には、学級や学部などの集団での配慮的な指導だけでなく、個別、あるいは小集団で、集中的、治療教育的にプログラムを組んで指導することにより、よりよい改善が予想できる子どももいる。

そこで、本校では、子どものかかえている問題及びその原因は何なのかをしっかりと見極めたうえで、①「養護・訓練に関する指導」と併せて、②「養護・訓練の時間における指導」として、個別にあるいは小集団による治療教育的な取り組みを行っていくことにする。

## 2. 目 標

- 知覚・認知、運動・平衡感覚、意思の伝達、思考・概念形成等の様々な障害を併せ持つ精神発達遅滞の児童生徒に対して、治療教育的取り組みを行い、心身の障害の状態を改善、克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養う。

### 3. 指導事例（養護・訓練の時間における指導）

#### (1) 対象児

U・H 5年生（男） 昭和49年5月11日生

#### (2) 生育歴

（乳児期） 正常分べん

3か月目 M保育園入園

（幼児期） K保育園，W保育園，A保育園，T保育園と保育園が変わる。

A保育園では，友達関係が悪く，かんしゃくを起こしていた。

夜尿があり，おむつをしていた。

へん平足で，4歳位になって歩き始めた。

発音不明りょうだが，身近な生活経験を話すことができた。

#### (3) 発達状況

（知能検査） IQ 40 MA 4歳5か月 辰見ビネー

（遠城寺式乳幼児分析的発達調査）

表1 遠城寺式乳幼児分析的発達調査（昭和58年10月）

移動運動	3歳9か月	基本的習慣	3歳2か月	発語	3歳6か月
手の運動	4歳2か月	対人関係	2歳8か月	言語理解	3歳9か月

#### (4) 言語状況

##### ① 構音検査

- /k/ /s/ /g/ /dz/ は，語頭，語中，語尾ともに誤り，/t/ /ʃ/ /d/ /dʒ/ に置き換わる。

/karasw/ カラス → /taraʃw/ タラシユ

/swika/ スイカ → /ʃwita/ シユイタ

/midzw/ みず → /mi dʒw/ みじゅ

##### ② 聴覚的弁別検査

- 単語を正しい呼称と誤り構音での呼称をして聞かせ，正しく呼称できている方を指示させて，正しい構音と誤り構音に対する聴覚の鋭敏さを検査する。
- 17問中14問（80%）弁別できる。/hasami/と/haʃami/ /dzo:riと/dʒo:ri/ /kani/と/tani/の弁別ができない。

③ 随意運動機能検査

- 舌の運動，指の運動を模倣させて，構音操作に必要な舌の運動と類似した指の運動を検査する。
- 舌を左右に動かしたり，舌で上口唇をなめたりすることが難しい。

(5) 診 断

(2)～(4)より，本児は，発語，言語理解は，ある程度発達していて，身近な生活経験を話すこともできるが，構音の発達がそれに伴っていないため，話したい気持ちがあり，人とよく話すものの，聞き返しをされたり，自分が言ったことを誤って受け取られたりするのをいやがり，自分の一方的な話になったり，聞いたことと別のことを話したりすると考えられる。

言語状況を分析すると，正しい音（k，g，s，dz）と誤った音（t，d，f，dʒ）の弁別ができず，そのため，表2のように，構音する場所を誤っている（歯音や軟口蓋音を歯茎音として構音する）。また，舌の動きが悪く，構音しにくいことも考えられる。

一方，舌の動きを教えると，正しい構音に近づく例もみられ（/k/→/t/と発音していたが，舌をおさえて発音させると/k/になる），また，本児も発音がおかしいこと

に気づいているため，構音指導することによって，発達が期待できると考えた。

表2 構音される場所の誤り

	歯音	歯茎音	軟口蓋音
破裂音	無声	t ← k	
	有声	d ← g	
摩擦音	無声	s → f	
	有声	dz → dʒ	

(6) 指導目標


言語状況の分析結果から，本児は，/k/，/g/といった軟口蓋音や/s/，/dz/といった歯音を，/t/，/d/，/f/，/dʒ/の歯茎音に誤る。このことは，舌の動かし方や聞き分ける能力に問題があるためである。そこで，舌の動きをよくしていきながら，正しい構音の仕方を教えていくとともに，特定の音（k，g，s，dz）を聞き取る練習をしていく必要があると考えた。

- ① 構音器官（特に舌）の動きをよくする。
- ② 聞き分け（/k/↔/t/，/g/↔/d/，/s/↔/f/，/dz/↔/dʒ/）ができるようにする。
- ③ /k/，/g/の改善
- ④ /s/，/dz/の改善

(7) 指導経過

舌の動きを教えると、正しい構音に近づくことがあった／k／の改善を最初に取り上げ、舌の運動とともに指導することにした。

昭和60年1月から2月、5月から7月の約5か月間、1回を40分、週2回指導した。

月	舌の運動	／k／の改善
1	<p>○ 舌の体操</p> <p><b>方法</b> 舌で口角、上下の唇、唇のまわりをなめたり、舌を出したりひっこめたりする。歯裏に交互につける。などを声を出しながらする。</p> <p><b>結果</b> 上唇に舌をつけるのがやや難しいが、それ以外はうまくできるようになった。</p>	<p>○ /ka/ を他の音節と区別する。</p> <p><b>方法</b> タ、カ、サ、マ……と、教師が言うのを聞き、カがあったら、旗を上げたり、カと書いたカードにおはじきを置いたりする。</p> <p><b>結果</b> タ以外の音と、カを確実に区別できるようになった。タとカの区別はまだ不確実(10回中2回は誤る)。</p>
2	<p>○ 舌のジャンケン遊び</p> <p><b>方法</b> 舌をつき出したらパー、舌を上歯裏につけてチヨキ、舌を下歯裏につけてグーなどの約束をして、ジャンケン遊びをする。</p> <p><b>結果</b> はじめは、パーからチヨキ、チヨキからグーにするなどジャンケンを代えるのに時間がかかったが、次第にすばやくできるようになった。</p>	<p>○ カとタを聞き分ける。</p> <p><b>方法</b> カとタをランダムに教師が言う。最初は、教師の舌の動きを見て、カとタの舌の動きの違いから、聞こえの違いを判断する。また、よく、 図1 聞いてから判断するように、図1のように、教師の言った方の文字カードに走っていったり、跳んだりする活動を取り入れる。</p> <p><b>結果</b> カとタを区別でき、正反応が確実になった。</p>
5		<p>○ 有意味の単語の中からカが入っている単語を区別する。</p> <p><b>方法</b> カメ、ウサギ、サカナ、ネコ……と、教師が言うのを聞き、単語の中にカが入っていたら(カ)メ、サ(カ)ナ旗を上げる。</p> <p><b>結果</b> 単語の中でもカの聞き分けができるようになった。</p>
6	<p>○ ほほつき遊び</p>	<p>○ /k／の構音指導</p>
7	<p><b>方法</b> 左右のはは、上下の唇の内側を、交互について遊ぶ。</p> <p><b>結果</b> 唇の内側をつくのが最初は難しいようだったが、できるようになってきた。</p>	<p><b>方法</b> /a／の音を出すように指示して口を聞かせ、舌先が上がらないように、ストローでおさえ、/k／を誘発する。</p> <p><b>結果</b> /k／ができるようになり、単語でも、語頭(カ)ラス、カメラ)にくれば えるようになった。</p>

(8) 考 察

本児は、舌の動きが悪く、また、特定の音の弁別もできなかったため、正しい構音操作は難しいように思われたが、結果的には、/k/と/t/の弁別ができるようになり、舌の動きもよくなり、/k/が構音でき、語頭なら単語でもカ、キ、ク、ケ、コが発音できるようになった。このことは、学習により、舌の動きがよくなり、聞き分けができるようになったためだと考えられる。さらに、表1と表3の比較からも分かるように、この指導期間に、発語や言語理解が発達し、それに伴って、

表3 遠城寺式乳幼児分析的発達調査(昭和60年5月)

移動運動	3歳9か月	基本的習慣	4歳2か月	発 語	4歳6か月
手の運動	4歳2か月	対人関係	3歳9か月	言語理解	4歳6か月

対人関係も伸びがみられ、構音の発達が対人関係にまで影響を及ぼしていることが理解できる。

また、/s/、/dz/など指導していない音は、改善していないことを考えると、特別に取り上げて指導するからこそ、効果が上がったのではないと思われる。